

映画になった拙作 『ふみ子の海』

上越市 市川信夫

映画が街にやってきた

二〇〇六年は映画とともにやってきました。まだ雪の残る三月になると、映画『ふみ子の海』のロケスタッフが続々と上越に入ってきました。総勢四十人ほどの大部隊です。地元でもロケを支援する「上越フィルムコミッション」が発足して、街は映画の話でもちきりになりました。

上越映画鑑賞会が中心になって、エキストラの募集や、昭和初期という時代設定に合わせた着物集めも行われました。「粋な芸者をやってみたいと申し込んだら、年増はいらない。仲居でどうですかって言われちゃった。ま、それでもいいか」「市長も花街の旦那衆で出演するんだって」

「母の形見の着物だけど、この先保管も大変だし映画の中で残してもらえたら」

と話題が飛び交います。「上越から感動の映画を世界へ」と期待が高まりました。

克蘭クインは大雪のなか

二月十四日雪に埋もれる牧区原の明願寺で本格的な上越ロケが克蘭クインしました。まだ見上げるような雪の壁に埋もれた山門を掘り出し、柱に「私立高田訓練学校」の看板を掲げて、初めてふみ子が盲学校を訪ねてきたシーンの撮影です。ふみ子役の鈴木里子ちゃんは十歳。千葉の小学校の四年生です。雪のちたつく寒い朝でしたが、裸足に雪下駄を履いて、「こんな雪見るの初めて」と言いながら、雪まみれになってテストを繰り返していました。

この原という集落は、『ふみ子の海』のモデル粟津キヨさんの出身地で、キヨさん

んは子どものころよく明願寺へ遊びに来て、先代の和尚さんから本を読んでもらったといいます。粟津さんのゆかりの寺をぜひシーンに入りたいというスタッフの願いで、克蘭クインは明願寺になったのでした。

因縁というのでしょうか。ロケの進行する春に『ふみ子の海』の舞台となった高田盲学校は、卒業式を最後に百十八年の歴史の幕を閉じることになっていました。映画の準備のためにこれまでもお世話になっていいる盲学校の最後の卒業式に、何かお礼がしたいというプロデューサーと相談して、女優の高橋恵子さんとふみ子役の理子ちゃんが学校を訪ねて、高等部理療科を卒業する二人と中学部を卒業する女子一人と小学校一年生の男の子の四人に花束を贈りました。

「テレビで見ている女優さんと、握手してもらえるなんて、夢のようです」と感激していた卒業生たち。もう帰ることのない廃校になる母校を果立つ人たちにとって、忘れられない思い出になったようでした。

上越を中心のオールロケ

映画は上越市とその周辺でほとんどのシーンを撮る計画でした。上越市の文化財になった今井染物店、昭和初期の病院

の施設がそのまま残っている戸野目の小柳医院、大島村の飯田邸、稲田の雁木通りと昔ながらの商店、料亭宇喜世など、上越に残る古くて立派な建物や風景が映画のシーンに取り入れられました。そういう意味で映画『ふみ子の海』は上越にとつて貴重な財産になるでしょう。

高橋恵子を始め、藤谷美紀、中村敦夫、水野久美、遠野風子、平田満、あおい輝彦などテレビや映画でおなじみの有名な俳優が、上越にやってきて、主役のふみ子を助けながら名演技を見せてくれました。

この映画の制作をしているCALというプロダクションは、テレビの連続時代劇「水戸黄門」や「大岡越前」や正月の大型時代劇「国取り物語」など司馬遼太郎の作品などを多く手がけている有力なプロダクションで、有名な俳優ともたくさん契約しています。そんな俳優たちが、プロデューサーとの友情出演で上越まで来てくれたということでした。



市川信夫さん



しかし、有名も無名もいざ撮影が始まれば区別はありません。撮影現場は監督のメガホンの「ヨーイ ハイ」のかけ声で物音一つない静寂な世界に変わり、緊張感がみなぎって演技に火花が飛びようでした。主役の理子ちゃんも日を追って杖を突いて歩く姿もサマになって、まるでふみ子が乗り移ったような真迫の演技を見せてくれました。大女優の高橋恵子さんの演ずる按摩の師匠との丁々発止のやりとりもこの映画の見所の一つです。

ロケは四月九日に高田の夜校を撮って終了の予定でしたが、寒い春で桜は開か

ず、想いを残してクランクアップとなりました。

「ハンディに負けずけなげに生きたふみ子の姿を、二トなどと言われる無気力な現代の子どもたちに視て欲しい」という製作者の意図がどのようにスクリーンに表現されるのでしょうか。上越で生れた物語が、上越の風景の中で感動の映画に……十月の銀座シネスイッチでのロードショウが待たれます。

著者 市川信夫さんの略歴

一九三三年新潟県上越市生まれ。新潟大学教育学部に学び、小学校教員、盲学校・養護学校の教師として人間の原点を学ぶ。児童文学に志し坪田譲治に師事。一九九一年に『ふみ子の海』（理論社）で児童福祉文化賞受賞。ほかに『たった一つのおかし』（光村図書）、『雪国から』（田畑書店）、『雪と雲の歌』（ポプラ社）などがある。民族学者だった



父の遺志を継いで高田賢女の研究を続ける。現在、上越市文化財審議委員、上越保健医療福祉専門学校校長などを務める。